

D 恐竜 inosaurs

恐竜博物館ニュース

第2号

2001.3.25

福井県立恐竜博物館

特集：カナダ アルバータ州 ロイヤル・ティレル古生物学博物館紹介 Part 1

目次 ▼竹内 均博士との館長対談…2-3 ▼特集：ロイヤル・ティレル古生物学博物館紹介…4-5 ▼研究ノート／博物館バックヤード…6
▼展示標本紹介（オウラノサウルス・珪化木）／開館を振り返って……7 ▼行事案内／ダイノメイト／編集後記……8



竹内 均博士との館長対談 博物館を包む勝山と大野と



■竹内 均 (たけうち ひとし)

1920年福井県生まれ
地球物理学者
福井県立博物館名誉館長
東京大学名誉教授・理学博士
科学雑誌「Newton」編集長

濱田：先生には福井県立博物館時代からすっかりお世話になりありがとうございます。

竹内：とんでもない。考えてみますと、はじめは恐竜の化石があんなにたくさん出てくるとは思っていませんでした。僕は本当に運がいいんですね。もしかしたらという期待はありましたが……。それがちょうど名誉館長を始めた頃から出始めたんですよ。もともと日本列島がアジア大陸にくっついてたでしょ。そうしますと日本はアジア大陸の一部だし、その頃のアジアの恐竜といえばモンゴルが最初に浮かんで、モンゴルは近いからもしかしたらって程度でいたんですがね。

濱田：20世紀の終わりというのは先生の本来のご専門のプレートテクトニクスその他、地球の歴史に関した分野の研究が

急激に進歩しましたね。

竹内：それもまた運がよくて、ちょうど僕がプロの学者になった頃から大陸移動説や月の探査がはじまるし、恐竜までがそんなわけでえらい事です。

濱田：21世紀というのは、地球の研究にとってはずいぶんよい環境ができますね。

竹内：そうだと思いますね。今まであんまり地球のサイエンティストが社会にご奉公できなかったんですけど、これからはいろんな分野で貢献できるようなと思うんです。

濱田：そうですね。さらに、先生が編集長をされている雑誌Newtonの刊行が皆さんの目を地球、あるいは宇宙にまで広げることになりましたね。今地球は、やはり内側から見るとですね。

竹内：はい、別にノスタルジアではないですけど、Newtonは、私が大学を定年になった1981年の7月号が創刊号で、今年の7月号で満20周年を迎えるんです。

濱田：そうですね。この頃いわゆる科学雑誌がどんどんやめていくではないですか。地球環境問題があったからでしょうけれど地球理解が深まり地球科学隆盛期に向かう中で、反対に自然抜きの子供にインパクトを与えるものがなくなってきた。これは多分出版社会の事情だと思うんですが。

竹内：そうですね。残念なことですね。

濱田：先生が福井県大野市で過ごされた中学時代のお話をお聞かせ下さい。

竹内：大野には中学校の4年までいました。昔は小学校が6年、中学が5年、それから旧制高等学校が3年、大学が3年でしたね。中学2年の夏休みの前に、寺田寅彦先生の「茶碗の湯」という随筆を読んだんです。茶碗の中での対流のことが書いてあってその応用例として季節風、冬の北風、夏の南風とか海陸風など自然現象のことが書いてあって、大変感激したんです。

それで、この随筆から考えたことをまとめてみると、2つありました。まず、勉強すると自然界の謎解きができるんだということです。それまでは勉強嫌いでもなかったんですけど、点数が上がれば親が喜ぶかなぐらいに思っていたんです。勉強すると自然界の謎解きができるなんて思ってもいませんでした。それからもう一つ、寺田寅彦先生の経歴みたいなのが本の後ろについているでしょ。それを見て、自然界の謎解きをしてご飯が食べられような気楽な稼業があるもんだなと思ったんです。それだったら一生懸命勉強して東大へ行って、寺田先生みたいな学問やって、できたら東大教授になってなんてずうずうしいこと考えていたんですよ。

濱田：その当時ですか。

竹内：そうですね。それでひたすら勉強したら願いがかなって、東大の地球物理に入ると、それでまさに寺田先生直結の孫弟子になれたんです。

濱田：だけど、それはなんていうか、まじめにやっていたらということですよ。加えて竹内先生の場合、タイミングが実に上手につながって行くものですね。

竹内：勤勉というのは、とにかく一生懸命仕事するという。正直というのは約束したことは必ず実行するし、実行できそうにないことは約束しないこと。これが僕の定義とする正直なんです。これだったら実行できますよね。

濱田：先ほど地球と子供たちとの関係を話題にしましたが、僕がかわいそうに思うのは今の子供たちがこれだけの環境が整っているのに、自然に親しむとか、

地球になじむということに対して、どこかぎくしゃくしていますよね。どうしてなのでしょう。理科離れとかいわれていますよね。

竹内：やっぱり子供たちを取り巻く社会が複雑化しすぎているからだと思えます。

濱田：受験とか社会事情とかたくさんありますね。環境が整っているという事は、きっかけがあればいいんですけどね。これは手前みそになってしまいますが、恐竜博物館もきっかけ作りになればいいと思うんですよ。

竹内：それでいいんですよ。そういう点では福井県は恵まれているんですよ。恐竜なんかは喜んで見に来ますからね。

濱田：そうですね。恐竜の学問的な謎ではなくて、恐竜の持つキャラクターというんでしょうか人気というのか、インパクトの大きさは予想以上でしたね。開館の時に先生にも来て頂きましたけれども、80万人がエキスポに来て、そのうち63万人が博物館に入館している。だから、これからの流行言葉にはしたくはないんですけど、一生かかって知的成長を遂げる時、この博物館は生涯学習の場としてこれからすごく重要なんだと思います。

竹内：重要ですよ。科学好きの子供を作るきっかけとしては、科学雑誌だとか博物館、テレビなどは重要です。Newtonも結構、子供たちが科学に目を向けるきっかけになったと思います。

濱田：そうですね。そういう意味では僕は、フォーマルなエデュケーションというものに、限度が来ている気がするんです。これも改善しながら成長すべきでしょうけど。むしろ、インフォーマルなエデュケーション、例えば、科学雑誌の特にいいインパクトを与えるものや博物館など、これらによる方が結構人間の感性って刺激されるのではないのでしょうか。

竹内：そうですね。刺激するという意味で私が大野の小学校で教育された時の話をしましょう。小学校1年から3年まで尾崎先生という若くてきれいな女の先生に教わったんですね。その先生から教わったことで、今でも感謝していることは「生徒を育てるには誉めなさい」ということなんです。その先生に、何かのはずみで一度誉められたんです。朝、先生にお会いした時に「おはようございます。」と言ったのが誉められた。誉められるとうれしくなって、ずっと会う度に「おはようございます。」と言っているうちに、「ありがとうございます」と言ったら、また誉められて。それで、先生に誉められるのがうれしいんで、いい子になったという一面がありました。

それから、4年から6年生までは砂田先生という講談好きの男の先生に教わりました。この先生が自由時間のとき講談を一席やってくれました。みんな面白がってね、それで、僕自身は割と単純なもので、刺激を受けてすぐ親に少年講談全集を買ってもらって、かなり勉強しました。声に出して読んで、調子がよくなるとボンとかパッパッパと叩いて。それでおしゃべりが多少上手くな



福井

科学雑誌「Newton」編集長の竹内 均博士を濱田隆士館長が訪ね、対談を行いました。竹内先生は恐竜博物館のある福井県勝山市に隣接する大野市出身であり、福井県立博物館の名誉館長さらには福井県恐竜化石調査事業では、名誉調査団長として調査指導にも当たられました。対談では、恐竜博物館への期待、子供の頃のお話、さらには科学に目を向ける子供たちへの想いなど、先生のこれまでの体験に基づいた話をお聞きすることができました。今回はその一部を紹介します。
(平成13年1月18日東京都新宿区 ニュートン プレス社の編集長室にて)

ったと思います。先生がきれいだった、先生が講談をやってくださったというのがきっかけで、僕にとってはずいぶん貴重な特徴というのが身についた訳です。だから、何かいい刺激をと思うんです。何でもいいんです。

濱田：そこから引き出されて基礎ができていくわけですね。誉められるというのは、たとえば、マラソンの高橋尚子選手が小出監督に誉められたりというのは、対話式とかやっぱり「face to face」「heart to heart」というのが、人間のコミュニケーションの原点であると思います。今や博物館もIT時代の真っ只中にあるわけですが、映像など全部デジタル化する。これは、技術的には十分できるし、便利ですし、検索にも役に立つ。しかしそれ以上に恐竜の骨に触って「うわあ」という感動、というのが大切だと思うんです。先生の話がお上手なもの体験型の話で、本を紹介していくんじゃなくて自分のやってこられた事を中心にして話されます。また、いつでもまじめに自然界とか人とかに真正面から向き合っているじゃないですか。地道に体験を通してやるという気持ちが失せてしまっている世の中なんですね。便利すぎるのでしょか。

竹内：そうですね。だから、やっぱり刺激を与えるとか。また、どんなことでもいいんです。われわれ雑誌の編集長や科学博物館の館長たる者は、そういう刺激を与えられるようないろいろ工夫をすべきでしょう。

濱田：日常のちょっとしたこと、どんなことでもいいんです。

竹内：そうですね。どんなことでもそれをうまく使えればいいんです。

濱田：それから、定義されて「well defined」されたものがある事だという奇妙な価値観が生まれきて、謎で残ったものとか説明できないものとかが駄目だという風潮がありますね。けれども、子供たちにその謎の部分、科学では解明されていない、すごい研究者がたくさんいるけどそれでもわかっていない、というもっていき方がすごく重要だと思います。

竹内：重要ですよ。それをやっぱり自分で何とか解けたというか、これを解くヒントとなるようなものを見つけた時の喜びはこれはもう、大変なことですからね。そういう意味で僕が刺激を受けたのは、ウェゲナーとダーウィンです。ウェゲナーの本職は気象学者だそうですが、古代ミミズの化石の分布を調べて大陸移動を考えました。それだけではなくて、各方面からたくさんデータを集めて実証しています。ダーウィンも同じで、生物学と関係ないものまでデータを集めています。自然科学の特徴は実証です。僕の尊敬する自然科学者はこの二人で、1つ1つは弱い実証であっても、各方面から何百もデータを集めたら、これに納得しないわけにはいかないでしょう。

濱田：ダーウィンにしろ、彼のそういった素質が伸ばされる環境が与えられているんでしょか。そう考えると、子供たちは可能性を持っているわけで、学習環境を作ってもっとわかりやすく体験してもらおうと、思わぬ成長を遂げて、

勝山からすごい学者が出る可能性があります。子供たちの嬉々とした姿をみますと楽しいですね。

竹内：それと大切なのは、わかりやすくするということですね。僕はいつも、わかりやすく自分のわかる限界まで徹底的にことごとくやって、その結果を世の中の人に知ってもらうように、本に書いてみたり喋ったりしようと思っているんです。

濱田：それ、本当に実行なさいましたよね。博物館もポピュラーにしなければならぬのに、難しく展示しちゃっているのがあるじゃないですか。

竹内：だから、ここから得られる具体的な評価をわかりやすく人々に観てもらえるような、そういう展示の仕方しようという事が大切ですね。

濱田：そうですね。うちの博物館にはドームの中に35体の恐竜がいますね。あれ上から見たら恐竜が小さい。つまり、大きな恐竜を並べてみて集団の中に入れば小さいでしょう。それで、その小ささがやっぱりかわいいんですね。子供たちは、頭の中でそういう伸びのびした発想をやる自由度があって、大人は大きく見てしまうところを言葉では恐竜はかわいいという表現を使います。大ききではなくてかわいいという面白い表現、これには何か大切な点があると思いました。

竹内：本当にそう思いますよ。恐竜博物館は、立体的で上から恐竜を見下ろすようなこともできますよね。これも文化。こういう点でいちばん感激したのがニューヨークの自然史博物館です。

濱田：階段で上がって恐竜を上から見てしまう。

竹内：そういう工夫ですよ。

濱田：それぞれの研究とかちょっとレベルの上がった人にとってはすばらしい対象なんですが、もっと単純なところで、「どうしてこれから1頭分が分かるか」って素朴な質問を子供は持っています。「歯が1本でどうして分かるのか」とかについての話の方がひょっとしたらよいかという気もします。

竹内：そういう一面もあります。そのような子供たちの抱いた疑問や自由な発想を大事にして、可能性を伸ばしていくことが大切ですね。博物館をそのような場にできることよいですね。

濱田：それが生涯学習として、満足あるいは興味を引き起こすインパクトを与えるという意味で、重要なのは博物館の展示でもあり、解説でもあり、案内の人の役目だと思うのです。先生のおっしゃる事は他の社会でもそれは当然必要なんだろうけど、とりわけインフォーマルエデュケーションの学習メディアとしての博物館では、金科玉条になりますね。

竹内：刺激みたいな、どういったらいいかわからないけど、それがきっかけになってその人がそういうことを博物館で調べてくださればいいんです。博物館に来て帰る時に専門家になって帰られてもこれまた変な話ですから。だから、博物館というのは新しい学習とか、知的発達のきっかけとしての刺激を与える場です。そういう教育のコツは、やっぱり僕が田舎に生まれたのがそういうのだったのでよかったんでしょうか。

濱田：子供はね、風土もさることながら家庭もそうですが、初期の環境に何らかの影響を受けますよね。そういう意味で、博物館に行かなくても博物館のある町、博物館を包む勝山と大野と福井という、ここでいうオーラがこうあって、そこで育つということは素晴らしいことだと……。

竹内：恐竜博物館のステータスを上げるにはこれからが大切ですね。とにかく、福井の博物館から日本だけではなく海外に向けて情報を発信できるものになるといいですね。それと、例えば恐竜だったら恐竜に興味をもってもらう。どんなきっかけでもいいから……。そういう姿勢が大切ですよ。

濱田：今日は先生の話術にすっかりのせられてしまいました。貴重なお時間をさいて頂き本当にありがとうございました。

竹内：どういたしまして。すばらしい博物館になることを期待しています。

(記録：小島敏弘)



■濱田 隆士 (はまだ たかし)

1933年宮崎県生まれ
福井県立恐竜博物館館長
放送大学教授
東京大学名誉教授・理学博士
(財)日本科学協会理事長



荒野に建つ博物館

ロイヤル・ティレル古生物学博物館は、カナダ西部のアルバータ州第二の都市カルガリーから北東に約150kmのドラムヘラーという小さな町にあります。博物館はバッドランドと呼ばれる荒涼とした大地の中に、ぽつんと建っていますが、このバッドランドこそおびただしい数の恐竜化石が眠る宝庫なのです。

この博物館が開館する101年前の1884年、カナダ地質調査所の地質学者ジョセフ・B・ティレルが、この地を訪れました。その時26歳の地質学者であったティレルは、アルバータ州中

部にある石炭と金属鉱床の分布図を作成するために、カナダ政府から派遣された研究者だったのです。8月12日の朝、彼がキャンプを撤収して崖を眺めていた時に、20メートル以上も上に、たいへん保存状態の良い完全に近い肉食恐竜の頭骨を発見しま

した。それは彼にとって非常に興奮する出来事でした。

その恐竜は現在アルバートサウルスと呼ばれ、カナダで最初に見つかった肉食恐竜です。このティレルの発見が、カナダの恐竜発掘ラッシュ

の引き金となったのです。

その後、ドラムヘラーのある牧場主がアメリカ自然史博物館を訪れ、自分の土地に恐竜の骨化石があると言ったことがきっかけとなり、1909年にアメリカ自然史博物館のバーナム・ブラウンが発掘調査にのりだしました。その調査は1915年まで続きました。また、少し遅れて1912年にはカナダ政府が調査隊をつくりました。その代表はチャールズ・H・スタンバーグで、彼の三人の息子たちもこの隊に参加しました。こうしてカナダの恐竜発掘ラッシュが始まったのです。その結果、数多くの貴重な恐竜化石が掘り出されました。

このような歴史的な経緯とその成果のもとに、1985年9月25日、ドラムヘラーの町に世界規模の古生物学博物館であるロイヤル・ティレル古生物学博物館が開館したのです。



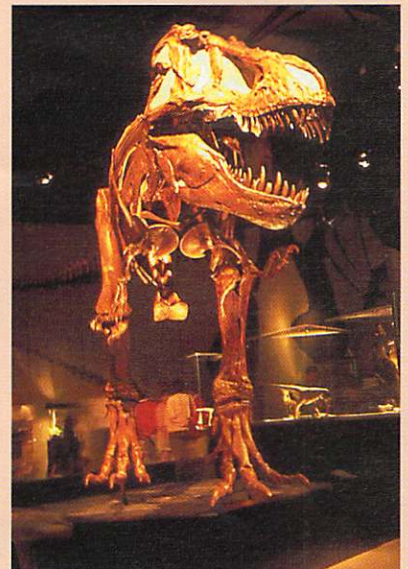
博物館展示の特徴

エントランスには、生き物たちの多様な表情を映し出した190枚の美しい写真が壁一面に貼られています。その写真のトンネルを通過して展示室へと向かいます。展示は地球誕生から46億年の生物進化の歴史をたどる流れになっています。そこは世界中

から集められた35体ほどの恐竜の全身骨格が、生き生きとした動きのあるポーズで展示されています。獲物をしとめ勝ち誇ったようにあたりをうかがうアルバートサウルスや、アロサウルスに襲われて倒れるカンプトサウルス、草原でゆったりと草を食むカモサウルスたちなど、ドラマチックな瞬間に設定された骨格のポーズに、私たちは想像をかき立てられます。発掘された恐竜の骨格のまわりについている岩石を、様々な道具を使って

博物館の入口 クリーニングするプレパレーション・ラボは、展示室からガラス越しに見ることができます。そこではクリーニングが時間と労力のかかる作業であることを教えてください。1階には恐竜の他に、哺乳類の進化が実物大の生体復元模型とともにわかりやすく解説されています。2階には古生代初期の頃に生きていた「バージェス・モンスター」とよばれる柔らかい体で奇怪な形をした生き物たちや、古生代の海に繁栄した魚類、大森林の中で進化の道をたどってきた両生類や爬虫類などが紹介されています。

また、展示室に隣接して温室があります。恐竜時代に繁茂していた植物たちの生き残りであるシダ類やソテツ類などが生い茂り、中生代の気候を思わせるような暖かい温室の中をゆっくりと散策できます。さらに、館内ではボランティアによる展示の解説が行われ、博物館周辺の野外ではガイドによる90分間の発掘サイト見学ツアーが行われています。そこでは一方的な説明ではなく、参加者に質問を投げかけて答える、双方向のやり取りの中で楽しく学習できるように配慮されています。



ティラノサウルス・レックス

博物館を支える人たち

ロイヤル・ティレル古生物学博物館は展示のための標本を集めるとともに、いろいろな分野の研究スタッフがいて、古生物



バッドランドの風景

古生物学博物館の紹介

Part 1

の研究が行われています。研究者は7名で、肉食恐竜を研究しているフィリップ・カー博士をはじめ、カメ、海生爬虫類、魚類、貝類、植物、地質などの研究者がいます。その他にも、デリケートな化石のクリーニングやモデリングをする技術スタッフ、10万点以上にもなる化石標本を管理するスタッフ、デザイナー、イラストレーター、教育普及担当スタッフなど、たくさんの人たちによってロイヤル・ティレル古生物学博物館は支えられています。

ロイヤル・ティレル古生物学博物館と姉妹提携

昨年11月23日に福井県立恐竜博物館とロイヤル・ティレル古生物学博物館との姉妹提携の調印式が、恐竜博物館で行われました。調印式に



はロイヤル・ティレル古生物学博物館のブルース・ゴードン・ネイラー館長がお見えになり、式の後、講演を行い、ロイヤル・ティレル古生物学博物館の概略と恐竜研究の紹介、地域と博物館のあり方などを話していただきました。両博物館ともに交流を積極的に行いながら、恐竜をはじめ古生物の研究が一層進展することが期待されています。

ロイヤル・ティレルの恐竜たちがやって来る

今年の7月7日から10月31日までロイヤル・ティレル古生物学博物館が所蔵する貴重な恐竜化石を中心に「ロイヤル・ティレル古生物学博物館の恐竜たち展」を恐竜博物館で開催します。アルバートサウルス、パキリノサウルス、ランベオサウルスなどお馴染みの恐竜が展示される予定ですが、そのほとんど



温室の様子

が日本初公開の標本です。また、あの「ブラック・ビューティー」（美しいティラノサウルスの骨格標本）も再びやって来る予定です。もう一度会いたい、今度は見たいと思っている皆さん、是非楽しみにしてください。

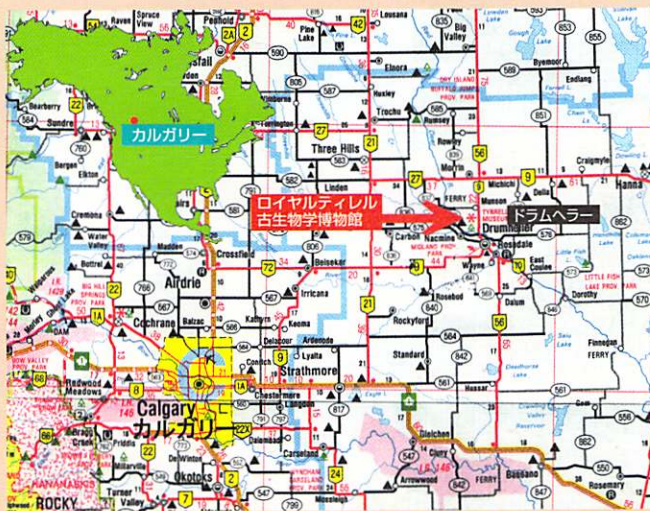
(後藤道治)



発掘サイト見学ツアー



ボランティアによる展示の解説



ロイヤル・ティレル古生物学博物館の位置

ホームページをみよう!

インターネット博覧会 福井県パビリオン「恐竜王国」

感動の「恐竜王国」へ。さあ、きみもあなたも今すぐアクセス!

<http://www.inpaku-fukui.com/>

「恐竜王国」には4つのセクションがあります。

地球上に生命が生まれて以来、進化を続けてきた様子をダイジェストでわかりやすくドラマチックに見せる「生命の歴史」、恐竜のことをもっと知りたい人のための「ダイノライブラリー」、化石発掘をバーチャル体験できる「恐竜化石発掘」、そしてすてきな景品つき恐竜クイズや折り紙などで遊べる「コミュニケーション」です。どれもこれも魅力満載で、時間を忘れて遊べます。

これからどんどん、新しいコーナーも登場しますよ。

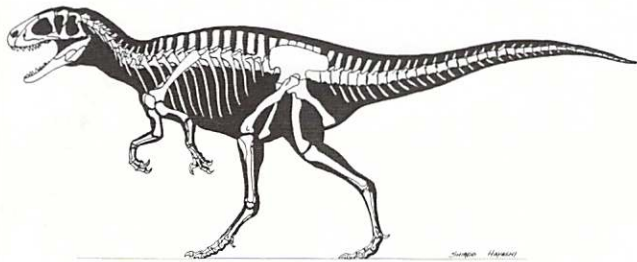
さあ、魅惑の「恐竜王国」へ、あなたも今すぐ旅立ちましょう! (一島啓人)



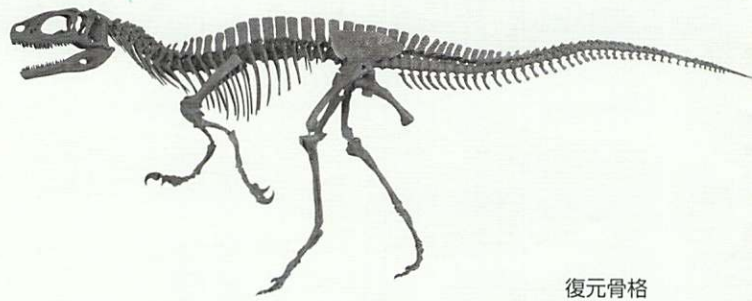
フクイラプトル・キタダニエンシスについて

平成元年から実施してきた「福井県恐竜化石調査事業」で発掘された恐竜化石標本の内、獣脚類の化石が海外の学術雑誌に掲載され、学名が有効となりました。掲載雑誌はCanadian Journal of Earth Sciences (カナディアン・ジャーナル・オブ・アース・サイエンス、2000年12月1日発行)で、論文のタイトルは「A new carnosaur (Dinosauria: Theropoda) from the Lower Cretaceous of Japan」です。この研究は、カナダ、ロイヤル・ティレル古生物学博物館のフィリップ・カリー博士と筆者の共同研究で行われました。学名は次の通りです。
 学名：*Fukuiraptor kitadaniensis* (フクイラプトル・キタダニエンシス)
 属名：*Fukuiraptor* (フクイの略奪者の意)
 種名：*kitadaniensis* (北谷産の意)

今回論文で記載されたフクイラプトルは、中型の獣脚類で計算上の全長が4.2mです。顎はドロマエオサウルス類に似た特徴を持ち、薄い刃のような歯があり、歯の前後には斜めに走る“血溝”があり、ティラノサウルス類の特徴を示しています。上腕骨や尺骨など前肢は、長く、ホソリとしてしています。また、前肢の先にはドロマエオサウルス類に似た末節骨(爪)も持っています。しかし、大腿骨は明らかにアロサウルスやシンラプトル(ジュラ紀、中国産)のような食肉竜



復元図



復元骨格

類のものに似ています。それは、大腿骨の両骨端の形状や、小転子が骨頭から離れており、また第4転子がよく発達していることなどから判断されます。その他、距骨や中足骨などの特徴もアロサウルス類のシンラプトルに類似しています。

フクイラプトルは、初期の研究では前肢の末節骨や顎の骨の特徴から、ドロマエオサウルス類に属すると考えられてきました(Azuma & Currie, 1995)。しかし、その後の発掘調査で得られた様々な部位の骨の特徴から結果的にフクイラプトルは、32の頭部の特徴や78の首より後方部の特徴を系統分析したところ、アロサウルス類のようなカルノサウルス類の原始的な位置にあると推論できました。

フクイラプトルは、一言でいえばジュラ紀に栄えたカルノサウルス類と白亜紀に栄えたコエルロサウルス類の両方の特徴を持っているともいえます。フクイラプトルの産出層準は、手取層群赤岩亜層群上部で白亜紀前期と考えられています。したがって、フクイラプトルの位置づけは、保守的な獣脚類から進歩的な獣脚類への中間的なものと考えられます。フクイラプトルは、アジアの獣脚類の中でも進化を考える上で大変重要なものと思われる。(東 洋一)

博物館バックヤード ……化石クリーニング室 ……

恐竜博物館の化石クリーニング室はエントランスホールの東側にあり、来館者が1階からも2階からもガラス越しに作業の様子を見ることが出来ます。化石クリーニング室は、本来博物館の裏方作業をするための部屋なのですが、その活動の様子を一般の方もうかがうことができるよう、展示の一部として公開しています。古生物を扱う国内外の新しい博物館では、このように化石のクリーニング作業を公開している施設が増えてきているようです。

野外で採取した化石は、そのままの状態では、研究や展示で扱うことができないものがほとんどです。化石を覆う余分な岩石を取り除いたり、もろい化石を樹脂で少しずつ固めたりする様々な処理が必要です。岩石の性質によって道具は使い分けされますが、硬い岩石に埋ま



っている化石を取り出すのに、圧縮空気で先端の刃先が前後に振動するペンタイプの機械、エアスクライバーが良く使われます。また、作業にともなって排出される岩石の粉塵は大型の集塵機で吸い取ります。壁側とガラス窓のそばにある8つの作業台には、拡大鏡のついたアーム式のライトや、大型コンプレッサーからの圧縮空気を送る送風口、大型集塵機からの吸い込み口、電動の道具を使えるようにコンセントなどが備え付けられて、とても快適に作業ができるようになっています。こうした化石クリーニングの作業が快適に進んでいくことが、恐竜博物館の活動をより活発にする原動力となるのです。

(宮田和周)



展示標本紹介

オウラノサウルス

(オウラノサウルス・ニジェリエンシス : *Ouranosaurus nigeriensis*)

オウラノサウルスは、イグアノドンに近い恐竜として知られていますが、「イグアノドン科」と呼ばれているグループに属している恐竜のほとんどは、ローレシア大陸（ヨーロッパ・北米・アジアなどを含む地域）から産出していますが、この恐竜はアフリカ大陸の中生代白亜紀前期の地層から発見されています。最近、ロードサウルスという恐竜もアフリカから発見されていて、ローレシア大陸に繁栄していた「イグアノドン科」が、いつどのようにしてアフリカ大陸に渡っていったのか非常に注目されています。

また、この恐竜をよく観察すると、他の「イグアノドン科」の恐竜と違う特徴を持っているのが分かります。例えば「帆」のような構造した神経棘や、ハドロサウルス科のような「クチバシ」を持っている事などです。「帆」は、体温調節や個体識別に役立ったと考えられ、「クチバシ」は植物を食べやすいようにこの様な形をしていると思われるかもしれません。これらの事実は、恐竜たちがどのように暮らしていたかを知る上で重要な鍵になります。

(小林快次)



スギ科の珪化木

(タクソディオキシロン・マツイワ : *Taxodioxylon matuiwa*)

珪化木とはシリカ（二酸化珪素）がしみこんで硬くなった木の化石のことを言います。「地球の科学」のコーナーに展示してある珪化木は、後ろの石炭層の剥ぎ取り標本と同じ露頭から産出したものです。石炭層中には時折珪化木が含まれていることがあり、九州の炭田地域では「松岩」と呼ばれています。松岩は石炭採掘時には邪魔で、硬くて採掘を手こずらせる厄介者として扱われていました。しかし日本の炭坑はすでにほとんどが廃坑となり、もう大きな松岩は採集できなくなっています。松岩のほとんどはスギ科の針葉樹で、学名もその名前に因んでつけられています。石炭層中には立ち株状態の松岩もあることから、第三紀始新世の約4500万年前にスギ科の針葉樹が湿地に繁茂していたようすを展示を見ながら、思い描いてもらえたらと思います。

(寺田和雄)



恐竜博物館の開館を振り返って



副館長 東 正信

福井県立恐竜博物館は、平成7年3月に「ふくい恐竜王国づくり調査研究会」の報告を受け、「基本構想・計画策定委員会」の設置から5年の期間を経て、平成12年7月14日に開館いたしました。そして、7月15日～16日の2日間にわたり一般無料公開を行ない、7月20日から9月17日まで恐竜博物館の開館を記念し「恐竜エキスポ

ふくい2000」が恐竜博物館をメイン施設として勝山市長尾山総合公園を主会場に60日間にわたり開催されました。開館から3月25日までの来館者数は697,615名に達しており、多くの方から好評を得ることができました。また、カナダおよび中国の古生物研究機関と姉妹提携ができたことも館職員一同、大変喜んでいるところです。

さて、この恐竜博物館の開館に至るまでを振り返って見ますと、昭和57年に勝山市北谷地係でワニの全身骨格を発見し、昭和60年には一つの化石が福井県立博物館へ鑑定のため届けられました。この標本が肉食恐竜の歯の化石で、手取層産恐竜化石の第一号となったのです。昭和63年には、ワニ化石発見現場での予備調査、平成元年から5年間かけて第一次恐竜化石調査事業を勝山市の手取層群

を対象に実施し、草食恐竜の全身骨格の復元をはじめ多くの成果をあげました。

この成果をもとに、福井県の有する恐竜資源を活かし「恐竜」を中心に据えた地質・古生物博物館として学術研究をはじめ生涯学習、地域振興、福井県のイメージアップ等に活用するとともに、我が国恐竜研究の拠点となり、大人から子どもまで楽しめ、人々のロマンをかきたてる恐竜博物館を建設いたしました。

この間ご支援、ご協力いただいた各位に対し厚くお礼を申し上げますとともに、恐竜博物館は、今後も恐竜をはじめ古生物学研究の拠点として、皆様から注目される情報を発信できるよう努力を重ね成長し続けていきたいと思っております。



中国科学院古脊椎動物古人類研究所との姉妹提携調印式（平成13年3月6日）

行事案内 (2001年4月～2001年9月)

所定の方法にて、行事名・住所・氏名・電話番号・年齢を、博物館までご連絡ください。
開催日の一か月前から受付開始で、定員に達し次第、締め切らせていただきます。



第2号

Dinosaur 恐竜博物館ニュース 第2号 (第一巻第2号) 発行: 平成13年3月26日発行
発行所: 福井県立恐竜博物館 〒911-8601 福井県勝山市村岡町寺尾51-11 電話: 0779-88-0001 (代) FAX: 0779-88-8700 E-mail: info@dinosaur.pref.fukui.jp
企画・編集: (代表) 小島敏弘 ■印刷: 株式会社エクスワン

講演会

講堂にて午後2時より 対象: 一般 (申し込み不要です)

■恐竜国際研究での恐竜博物館の役割
日時/4月29日(日・祝日) 14:00～
講師/濱田隆士(当館館長)

博物館セミナー 基礎コース

「地球生物の進化史」

申込: 電話、FAX、E-mailにて

■陸の古生物①「中生代に栄えた植物」
日時/5月20日(日) 14:00～15:30
講師/関戸信次(小松市立博物館専門員)
対象/一般 90名 場所/研修室

■陸の古生物②「アジアの恐竜」
日時/8月12日(日) 14:00～15:30
講師/東 洋一(当館職員)
対象/一般 90名 場所/研修室

■陸の古生物③「新生代に栄えた植物」
日時/9月15日(土・祝日) 14:00～15:30
講師/矢部 淳(当館職員)
対象/一般 90名 場所/研修室

■実習講座①「大型化石研究法-室内編-」
日時/6月24日(日) 13:30～15:30
講師/宮田和周(当館職員)
対象/一般 20名 場所/実習室

■実習講座②「大型化石研究法-野外編-」
日時/8月5日(日) 13:30～15:30
講師/小林快次(当館職員)
対象/一般 20名 場所/野外

■実習講座③「地質調査法I-野外編-」
日時/9月9日(日) 13:30～15:30
講師/野田芳和、宮田和周(当館職員)
対象/一般 20名 場所/野外

こども自然教室

対象: 小4～中3 40名 申込: 往復ハガキ、E-mailにて

■化石のレプリカをつくろう
日時/4月30日(月・休日) 13:30～15:30
担当者/宮田和周(当館職員)
場所/実習室

■木の化石を調べよう
日時/6月9日(土) 13:30～15:30
担当者/寺田和雄(当館職員)
場所/実習室

■押し葉標本をつくろう
日時/7月28日(土) 13:30～15:30
担当者/矢部 淳(当館職員)
場所/実習室

■恐竜化石を発掘しよう
日時/8月19日(日) 13:30～15:30
担当者/館長ほか当館職員
場所/恐竜化石発掘現場

■微化石を観察しよう
日時/9月15日(土・祝日) 13:30～15:30
担当者/後藤道治(当館職員)
場所/実習室

野外観察会

対象: 一般 40名 申込: 往復ハガキ、E-mailにて

■越前海岸の新生代の地層
期日/5月3日(木・祝日)
内容/越前海岸の新生代の地層を見学し、地層や地質について学習する
場所/越前町、福井市の越前海岸ほか

地学指導者実技講座

対象: 教師など 20名
申込: 往復ハガキ、E-mailにて

■室内実習
日時/6月17日(日) 13:30～15:30
講師/佐野晋一(当館職員)
場所/実習室



■野外実習
日時/8月3日(金) 13:30～15:30
講師/後藤道治(当館職員)
場所/野外

コンピュータ教室

実習室にて 対象: 4歳～小3親子 20組
申込: 往復ハガキ、E-mailにて

■恐竜シールをつくろう
日時/5月26日(土) 13:30～15:30
担当者/千秋利弘(当館職員)

■恐竜をかこう
日時/7月22日(日) 13:30～15:30
担当者/千秋利弘(当館職員)

恐竜ふれあい教室

実習室にて 対象: 4歳～小3親子 40組
申込: 往復ハガキ、E-mailにて



■化石のレプリカ教室
日時/5月5日(土・祝日) 13:30～15:30
担当者/小島敏弘(当館職員)

■恐竜折り紙教室
日時/7月15日(日) 13:30～15:30
講師/木村哲夫(折り紙作家)

■恐竜造形教室
日時/8月11日(土) 13:30～15:30
講師/荒木一成(恐竜造形作家)

■恐竜画教室
日時/9月23日(日・祝日) 13:30～15:30
講師/山本 匠(恐竜画家)

(千秋利弘)

ダイノメイト (後援会より)

ダイノメイト会員募集を平成12年7月より始めて8ヶ月が経過しましたが、おかげさまで全国各地から多くの皆様が入会して下さいました。

現在 個人会員248名、家族会員72名と順調に会員数が増加しています。平成13年度のダイノメイト行事として、化石発掘体験と会員交流会、海外恐竜ツアー等を計画しています。日程が決まり次第お知らせしますのでご期待下さい。多数の皆様参加をお待ちしています。

■ダイノメイト会員申し込み先

〒911-8601 福井県勝山市村岡町寺尾51-11
特定非営利活動法人 **福井恐竜博物館後援会**
TEL&FAX 0779-88-8730
年会費 個人会員 2,000円、家族会員 3,000円

編集後記

最近、海外からの恐竜博物館への問い合わせや資料の送付依頼が増えています。これまでも海外からの来館者が多数ありましたが、これからは、なお一層国際化への対応が必要と考えています。

恐竜博物館ニュースは年3回の発行を予定しており、今回は姉妹館であるカナダのロイヤル・ティレル古生物学博物館の紹介を特集しました。今年の7月から10月にかけて、ティレル博物館の企画展を開催します。次号ではその企画展の内容を特集として紹介しますので、楽しみにしてください。(小島敏弘)